

ソ連経済 730日の幻想

ゴルバチョフのペレストロイカは終わった

森本忠夫 — 著

ソ連経済730日の幻想

ゴルバチョフのペレストロイカは終わった

森本忠夫

東洋経済新報社

著者紹介

1926年、京都市生まれ。戦時中は海軍航空隊員として太平洋戦争に従軍。1952年、京都大学経済学部卒業と同時に、東洋レーヨン（現東レ）入社。以後、貿易戦線を中心に活躍。とくに社会主義圏への売り込みで名を馳せる。1986年、同社取締役を退任、発足当初の東レ経営研究所社長となる。現在、同研究所顧問、評論家。ソ連関係を中心に日夜健筆を振るうとともに、ライフワークの「太平洋戦争論」のまとめを精力的に進めている。著書に、『ニッポン商人赤い国に行く』『賑々しき死者たち』『魔性の歴史』など多数がある。

ソ連経済 730日の幻想

1990年12月13日 発行

著者 もりもとただお 森本忠夫
発行者 中島資皓

発行所 〒103 東京都中央区日本橋本石町1-2-1 東洋経済新報社

電話 編集 03(246)5661・販売 03(246)5467 振替 東京3-6518

印刷・製本 東洋経済印刷

本書の全部または一部の複写・複製・転載および磁気または光記録媒体への入力等を禁じます。これらの許諾については、小社(電話03-246-5634)までご照会ください。

© 1990 〈検印省略〉 落丁・乱丁本はお取替えいたします。

Printed in Japan ISBN 4-492-44127-1

ミ・マクロ、ミクロと、その分野を問わず、経済が一向に好転しないばかりか、いまやソ連経済は危機的なマイナス成長に落ち込み、ゴルバチョフは、経済改革の失敗を認めざるをえなかった。

ソ連経済のペレストロイカが成功するかどうかを巡ってはつきりしていることは、私的所有制度を含む多様な混合経済制度の下で、可能なかぎり広範な分野にわたる競争原理と市場原理を導入する以外に何らの道もないということなのだ。だが、いままで、ゴルバチョフを中心とした中道改革派の指導者たちですら、過去七十年の間、この国の経済制度を支配してきた古いパラダイムにこだわりの、ペレストロイカの初期段階では、私的所有制度や競争原理や市場原理といった言葉をすら使うことを慎重に回避していた。

無論、これらの概念自体が資本主義経済を意味すると考える頭の硬い保守派に気兼ねしてのことだったが、しかし、保守派の人々が、新しい経済制度への移行に反対している本当の理由は、彼らが国営企業を支配的経済制度とした経済の国家独占の上に胡座をかき、そのなかで、物質的特権と地位を保ってきたからだだった。いい換えれば、もし、私的所有制度や競争原理や市場原理がソ連経済のなかに広汎に導入されるとなれば、これらの人々が安住の地を失うからである。

一方、ソ連の国民大衆にしてからが、こうした制度を何か忌まわしいものと思ひ込んできたのも事実だった。彼らがこうした観念に囚われてきたのは、革命以来、過去七十年の間、私的所有制度や競争原理や市場原理といったものについて、これもまたイデオロギー上の「遺伝子」を受け継いで拒否反応や危惧以外に何の知識をも持ち合わせていなかったからだ。そして一方、現下の未曾有のモノ不足のなかで、もし、ソ連に市場原理を導入するとなれば、長期にわたって人為的に

はじめに

「われわれは、現存の経済管理体制がそれ以上に有効に機能しないような地点に到達しているが、新たな機構はなお十分な能力をもって作動していない。」

一九九〇年二月、ソ連共産党臨時拡大中央委員会が開催され、この大会で、一党独裁の放棄と複数政党を容認する歴史的決定が行われた。八九年秋以来、中欧・東欧で生起していた権威主義体制の崩壊を契機に、ソ連共産党は根本的な脱皮を迫られていた。しかし、一体、どのようにして新たな地平に向かって地歩を進めるのか。冒頭の文章は、九〇年七月に開催されていたソ連共産党第二十八回大会の綱領原案に示された叙述の一節だが、この文章が明示しているように、政権政党であるソ連共産党は、経済のペレストロイカを巡って、現在の经济管理体制が機能不全のままであり、いまま依然として未来に向かっての確信のある処方箋を持っていないことを率直に認めていた。

周知のとおり、ペレストロイカの最優先課題となってきたものは、ほかならぬ経済のペレストロイカだった。だが、ゴルバチョフ書記長が登場してからすでに五年数カ月の歳月が流れ、ペレストロイカ総路線が発動されてからすでに四年以上の時日が経過した今日、ソ連指導部が当初掲げていた経済改革の公約にもかかわらず、振り出された手形の多くが不渡手形となっていた。マクロ、セ

この少し前の九〇年四月二十五日、ゴルバチョフは、スベルドルフスクでの演説で「提案される措置は急激な変化をもたらすものだから、すべての人々が賛成するとは思わない」と述べる一方、価格を一挙に自由化する「ショック療法」はとらないことを明言した。

このとき、ゴルバチョフがいつていたことは、まず、現行の価格体系を改訂することからことを始め、その後、市場原理を導入して、国民経済の再生産を巡る国家経営諸資源の均衡的配分を図り、現下の深刻なモノ不足を解消する。しかし、この過程は、かなりの期間にわたって、価格の高騰をもたらし、その間、国民の生活水準は一時的に低下するだろうが、低所得者については、特別の政策的配慮を施すなど、国民に与えるダメージを最小限にすることを考えているというものだった。ペレストロイカを巡って困難な時が過ぎいく傾向は、ここ当分、続くだろう。しかし、客観的に見れば市場原理の導入は、経済の活性化にとって避けて通れない必然的道程だ。例えば、改革派のN・シモニアン教授はこう述べている。

「問われている問題は、（中略）国家の危機である。中央管理制度が生産を独占し続け、中央監督局と生産との結び付きが経済的性格のものでなく行政的性格のものであり続けるかぎり、われわれにはいかなる発展もなく、どんなによい意図をもってことを行っても、天国へではなく地獄へいくことになるだろう。」（『モスクワ・ニュース』一九九〇・三・四）

上述のごとく、ポーランドで実施されたような「ショック療法」はとらないというのが、ゴルバチョフの施策だが、では、具体的にどのようなプロセスをとってソ連経済に市場原理を導入するのか。結論からいえば、九〇年十月、市場経済への移行案が最高会議で採択されたものの、この経

済改革といわれるものは、なお、いき着くところの見えない過渡期特有の深刻な混乱の種を宿している。

ところで、本書の意図は、九〇年七月、北大西洋条約機構（NATO）首脳会議とヒューストン・サミットで、西側が打ち出したソ連に対する経済支援問題と、九一年四月のゴルバチョフ訪日を視座に置きつつ、ソ連経済の現状をさまざまな角度から分析し、今後の日本の対応に資することにある。

本書で取り上げた諸問題は、ソ連経済のほぼ全分野にわたる現状だが、以下簡単に要約しておく。

第一章と第二章は、ソ連経済に纏わるマクロ・バランスの崩壊状態に視点を置いた、いわば“総論”であって、まず、第一章では、一九八九年以来、深刻な危機的下降局面に入ったソ連経済の実態、すなわち、「経済の無権力状態」といわれるもの、ソ連経済の伝統となってきた重工業優先政策の修正と消費財生産への傾斜、主要産業部門での生産の低下とその原因、「生産のリズムの乱れ」といわれるものを巡っての労働者が抱える心理的・制度的諸問題、膨大な「未完工工事」の存在、調整的低成長政策への転換、「アキレス腱」としての農業問題、昂進するインフレなどを中心に分析した。

は じ め に
v

第二章では、ソ連経済になぜインフレが起き、モノ不足経済が起きたのかという視点から、現在、惹起しているスタグフレーションの契機となった八八年以来のプロセス、つまり、経済を巡るベレ

ストロイカそのものの自家撞着と、いままでのソ連の経済政策に纏わる構造的矛盾について分析した。ここでの分析の対象となったテーマは、国民の改革に対する不満の現状、「ベトナム並みに落ち込んだ」といわれるソ連経済の実態、八八年の改革の導入を巡って価格改訂の噂が引き起こしたパニック現象、無原則な賃上げによる過剰流動性の増大、経済改革の「金看板」となっていた協同組合が引き金となつてのモノ不足とインフレ、「新商品」への生産傾斜がもたらした企業経営の諸矛盾、それにソ連の経済政策につき纏つてきた固有のモノ不足とインフレの構造的諸要因である。

第三章以下は、いわば「各論」であつて、まず第三章では、ソ連経済のセミ・マクロに視点をあて、各産業セクターを巡つてのいびつな発展の矛盾、すなわち、大規模建設を巡る投資の動向と問題点、消費財生産への一層の傾斜、軽工業・食品工業・耐久消費財部門の依然たる計画未達、農工部門の発展の停滞、緊急輸入によるモノ不足の解消策と「差別外貨係数」による収奪、「軍民転換」といわれるものの実態、燃料・エネルギー部門での下降に転じた石油生産の実態、機械・設備部門の不振、化学・製紙・製材部門での深刻化する供給不足、冶金部門での依然として進展しない技術再装備、建設・据付請負部門での増大する「未完工工事」を分析した。

第四章では、発展から取り残された第三次産業と流通の実態に焦点をあて、そのなかでも分析の中心となつたものは、モノ不足のなかで形成された闇経済セクターの実態と昂進するインフレの問題を分析した。

第五章では、経済のペレストロイカの下で鳴り物入りで導入された上述の協同組合の現実と矛盾に再び照明を当て、ことに協同組合を巡る犯罪の問題を分析した。

第六章では、重大な社会問題となっている住宅と社会施設の建設の遅れを分析した。

第七章では、いままでソ連には存在していなかったといわれた巨大な失業と貧困、とりわけ、行革の推進によって生まれた“ベレストロイカの犠牲者”の実態を分析した。

第八章では、貿易構造の諸問題、すなわち、慢性的赤字に転落した貿易収支、社会主義圏貿易から資本主義圏貿易への転換の進展、「対外経済関係における個々の否定的現象」といわれるもの、合併事業を妨げるソ連の内部事情を分析した。

第九章では、国民経済の大動脈であるインフラストラクチャーの不備がもたらした経済的矛盾の諸問題、ことにあちこちに山積する滞貨、無政府的な交通渋滞などの実態、その制度的原因、民族紛争による輸送の混乱、鉄道が抱える諸問題、多発する鉄道事故と労働者の条件、四十一年にもわたる料金の据置きと鉄道の赤字転落、劣悪なサービスの問題などを分析した。

第十章では、“負の遺産”としての巨大な環境汚染、すなわち、百三都市を覆う環境破壊、綿花の栽培がもたらした水質汚染、危機的状況となったバイカル湖の現状、チェルノブイリ原発事故を巡るそのあまりにも深刻な後遺症などを分析した。

最後に第十一章では、荒唐する社会と激増する犯罪の実態を分析した。

本文中での金額表示は、原則としてルーブルに統一した。金額の大きさは、一ルーブル＝二五〇円として円換算していただければ、ほぼそのイメージをつかめると思われる。

本書は、『週刊東洋経済』で十回にわたって連載された筆者の論文が基礎となったものではある

が、出版にあたって大部の加筆と一部の訂正を行った。大方のご批判を仰ぎたい。

なお、本書の出版に当たり、お世話になった東洋経済新報社『週刊東洋経済』編集長星加泰氏および同社出版局内海健雄氏のなみなみならぬご好意に対し、心から感謝の念を捧げたい。

一九九〇年秋

森本 忠夫

目次

はじめに

第一章 危機的下降局面に入つたソ連経済

..... 1

経済の無権力状態 1	急カーブの拋物線 4	重工業優
先政策の修正と消費財生産への傾斜 7	主要産業部門で	
の生産低下とその原因 11	「生産のリズムの乱れ」とい	
われるもの 16	「幹部がすべてを決定する」 20	腐つ
たトマト 23	「資本主義国では働かねばならなかった」	
26	底抜けの楽天主義、こ狡さ、浅知恵、アナキズム 27	
四千億ルーブルに上る「未完工物件」 32	投資効率の悪	
化を背景とした調整的低成長政策への転換 34	「アキレ	

ス臽”としての農業問題 36 笛吹けど踊らず 46 昂進
 するインフレ、上昇する賃金と労働生産性のギャップ 49
 国民経済の危機的現象が強まった 55 「ソ連は二流国家
 へと転落してしまった」 57

第二章

スタグフレーション下のソ連経済

..... 59

国民の多くが改革に不満を表明 59 ベトナム経済並みの
 ソ連経済 63 噂が引き起こしたパニック現象 69 無原
 則な賃金の引上げによる過剰流動性の増大 72 協同組合
 が引き金となったモノ不足とインフレ 74 “Nマーク商
 品”への傾斜がもたらした矛盾 76 生産財生産部門への
 優先的重点指向 80 巨額の補助金と軍事費への支出 84
 “加速化政策”の失敗と“総生産高主義”の悪弊 89 肥
 大した管理機構と独占体質 91

第三章

産業部門のいびつな発展の矛盾

..... 93

大規模建設を巡る産業投資の動向と問題点 93

消費財生

第四章

遅れた第三次産業部門と流通の実態

.....143

産への一層の傾斜98 軽工業・食品工業・耐久消費財部門の依然たる計画未達102 農工部門―発展の停滞109 緊急輸入によるモノ不足の解消策と“差別外貨係数”による収奪112 “軍民転換”といわれるものの実態115 燃料・エネルギー部門―下降に転じた石油生産121 機械・設備製作部門―低目の計画も未達125 化学・製紙・製材部門―深刻化する供給不足129 冶金部門―依然として進まない技術再装備134 建設・据付け請負作業部門―増大する「未完工工事」137

第五章

協同組合の発展と犯罪の増大

.....159

――雨後の竹の子、協同組合の発展159

犯罪の増大とその原

“闇の王国”143 消費財の九〇％が買い溜めを目的とした購買150 有料サービス部門の不足経済154 “新マーシャル・プラン”の呼び掛け156 “新マー

— 因 161 インフレを促進する協同組合 170

第六章 住宅と社会施設建設の遅れ……………173

住宅をめぐる問題 173 「……ねばならない」式の大統領

命令 179 社会施設建設の遅れ 182

第七章 巨大な失業と貧困……………185

人口と就業者 185 深刻化する失業問題 187 行革と“ペ

レストロイカの犠牲者” 191 「倒木下の危機」 193

第八章 慢性的赤字に転落した貿易……………197

貿易収支の逆調 197 対社会主義圏貿易から対資本主義圏

貿易へ 199 逆超続くソ連貿易 201 ソ連貿易を巡るいく

つかの問題 203 「対外経済関係における個々の否定的現

象」 205 合併事業を妨げる内部事情 208

第九章 国民経済の大動脈・インフラの不備

213

- “滞貨の山” 213 二百年前の貨物輸送規制 216 パンク状態のコンテナ・ヤード 218 驚くべき無政府的交通渋滞
- 222 制度が災いした滞貨現象 224 輸送途中の“目減り”
- 225 民族紛争と輸送の混乱 228 鉄道が抱える問題 230
- 多発する鉄道事故と労働者の条件 233 四十一年間にわたる料金の据え置きと鉄道の赤字転落 236 劣悪なサービスの問題 237 輸送を巡る計画の未達と依然たる滞貨 240 調整的低成長政策下での輸送の停滞 243

第十章

負の遺産としての巨大な環境汚染

247

- 百三都市、人口五千万人を覆う環境破壊 247 綿花栽培がもたらした水質汚染 250 バイカル湖の危機 252 チェルノブイリ事故の原因として新たに浮かび上がった設計ミス 254 チェルノブイリ事故の背景にあったもの 256 エネルギー政策の骨子 258 チェルノブイリ事故の深刻な後遺症 261 核大国の悲劇 266 改善されない環境汚染 268

第十一章 荒廃する社会、激増する犯罪……………273

“マフィア”の登場 273 犯罪の伸び率対前年比三二% 276

犯罪多発の原因 280 警察力を上回る犯罪組織の力 283

逆手に取られた民主化 285 不法に所持されている膨大な

武器 286

あとがきに代えて ソ連の経済改革と西側諸国の対ソ経済支援について……………289

第一章 危機的下降局面に入つたソ連經濟

經濟の無權力狀態

未来に向かつて流れる現代世界の潮流がどのようなものであるのかを見定める場合、われわれは、どの流れが未来の大河を形成する主流となり、どの流れが傍流あるいは支流であるのかをはつきりと見きわめねばならない。

こうした観点から見れば、現代世界の主流となっているものは、かつて長い間、世界の政治体制として形成されてきた一連の諸国家における旧い權威主義体制の崩壊から民主化への流れであり、また、これらの諸国家の經濟体制を支配していた行政的指令制度の崩壊から市場經濟化への流れである。さらに、經濟体制の世界的相互干渉化（グローバリゼーション）を通じての融合への流れでもある。このような潮流は、人々の予想を越えた驚くべき速さの激流となつて、いまソ連・中欧・東欧の諸国を巻き込みつつ、激しい渦を巻きながら流れ出ようとしている。その流れは、しかしながら、時に巨大な岩礁によつて阻まれ、また必ずしも、そのいき着く先を知らないかに見える。

今日、民主化とこの民主化が必要条件となつての市場經濟への移行を巡つて、これらの諸国には